

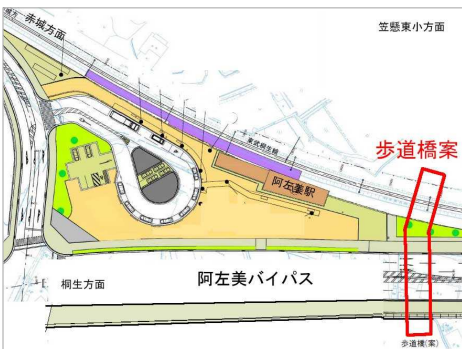
# さんくす

## 歩道橋設置に向け工事開始

笠懸東小学校への通学路の安全確保のために完成が待たれている歩道橋の工事が、僅かながら進んできました。

同校への通学路は阿左美アンダーを利用して、「暗い地下道を通学させるのは怖い。不審者が潜んでいるのではないか。4車線となる県道は危険」など、保護者から不安の声が上がっていました。そのため、PTAや地元区長・住民から強い要望があり、工事を行う土木事務所も歩道橋を設置することにしました。

7月末の時点では県道北側の用地買収が終わり、盛り土がほぼ終わった状況です(写真右上)。設置箇所は下図(みどり市しおり)の赤線部分で、先ずは県道の北側から県道を跨ぎ駅の敷地までが設置されます。



線路を跨ぎ東小方面への架橋については、現時点では東武鉄道の承認待ちとなっていて、2期目の工事となるもようです。

通学路の安全を守るためには、歩道橋が完成した後に阿左美アンダーの工事にかかるべきところでしたが、順序が逆になっただけでなく、架線を跨ぐ歩道橋ができるまでまだしばらく時間が必要です。

当初の歩道橋計画は県道を跨ぐだけのものであり、PTAや地域住民の力で架線を跨ぐ構造になった経緯があります。一区、二区、三区の区長らからも早期完

成を望む要望書を市長に提出している(前号既報)歩道橋ですが、引き続き要望を出し続けることが必要かもしれません。



## 三区納涼祭の中止について

大会長 藤生定雄

みどり市では新型コロナウイルスの感染症拡大防止の観点から、市の納涼祭事業が取りやめになりました。

三区納涼祭にご協力頂いている関係団体や、実行委員長の公民館長らで協議した結果、「区民の安全確保を最優先し、残念ながら今年も納涼祭は中止せざるを得ない」との結論に至り、6月の回覧板にてお知らせ致しました。

本年度予定された各種事業に関しても同様の結果となっています。新型コロナウイルスの感染状況、ワクチン接種状況等により、今後の計画が見直されることもありますので、逐次報告させていただきます。

行事の中止、規模縮小等により様々な課題も見えてきています。来年度の納涼祭開催に向けての課題を早急に洗い出し、各種活動再開の下準備を進め、その時のために備えておきたいと思っております。引き続き三区の皆様のご協力をお願い致します。

## 散歩道 (17) 岩宿駅

1889年(明治22年)11月20日、両毛鉄道株式会社によって前橋一小山間を結ぶ両毛線(当時は両毛鉄道)が開業しました。

開業当初の岩宿駅のある場所は「阿左美村」と呼ばれていて、駅名も「大間々停車場」とされていました。村外の「大間々」の地名が駅名とされた状況には当時の人々も疑問に思ったようで、両毛鉄道の社長からの回答書が残されているそうです。ちなみに駅名は変更できませんでした。



その後、1911年(明治44年)4月に国鉄足尾線(現・わたらせ渓谷鐵道)の開業に伴い、大間々駅が誕生したことで、翌月に両毛線の大間々停車場は「岩宿駅」に改称されました。

なお、両毛鉄道は、1897年(明治30年)1月1日に日本鉄道に譲渡されて「国鉄両毛線」となり、さらに国鉄の民営化に伴い「JR両毛線」となりました。現在は五区を中心に岩宿駅北口の整備計画の説明会が行われています。

## 地区公民館長挨拶

令和3年度、第三区地区公民館館長になりました赤石光史です。

令和2年度より引き続き、三区の公民館活動の活性化に寄与していきたいと思ひます。

昨年度から世界的に蔓延している新型コロナウイルス感染症が私たちの生活を脅かしています。今年度の地区公民館の活動もどうなるか現状ではわかりませんが、区民の皆様の健康第一に取り組んで参ります。

あまり活動ができない一年となってしまうかも知れませんが、ご協力頂き、この緊急事態を区民の皆様と力を合わせて乗り越えて行きたいと思ひます。引き続きご協力お願いいたします。

写真左から藤掛貴志副公民館長、赤石光史公民館長、は森田広行副公民館長。



## 公民館ホールに庇(ひさし)増設

三区公民館ホールの掃き出し部分に新たに庇が設置されました。雨天時は雨がホールに吹き込み、引き戸を締め切った状態で使用して

いました。廃品回収時や各イベント行事、お祭り、避難訓練等の活動にさいし、少し不便という声もありました。昨年は新型コロナの関係で行事がほとんど行われない中で、今後の利便性を広げ、外出入り口として少しでも雨よけの場の面積確保をする事になりました。

令和3年度地域集会所整備に関する補助事業(半額は区が負担)を受け、新しい庇の取付工事が5月17日に行われました。構造はアルミの骨材で、屋根はポリカーボネート、間口6.3m、出1.2m、総額246,400円です。

建屋の軒の下に出幅のある庇がついたことで、雨の吹き込みはかなり改善されました。新しい庇は、祭り等のイベント時、外の定位置に張ったテントと上手く重なるよう高さを考え配置されていますので、多人数の行事にはホールと外の一体化が可能です。また、西側のテラスとあわせると広い面積が確保できるため、今後は様々な企画にうまく対応できると期待されます。



## 茶臼山・八王子山系ぶらり紀行(2) スズメバチトラップ

春の山野草が一段落した5月の荒神山では、ハイカー達が恐れるスズメバチが巣作りを始めます。藪塚の東毛少年自然の家管轄の各登山道には例年4月中旬に、これから巣作りを開始する女王蜂を駆除する目的で、職員さんがスズメバチトラップを各所に設置しています。そのお陰で昨年は夏場でもスズメバチはほとんど見かけませんでした。

トラップが設置されていない広沢町の樹徳高校野球部グラウンド付近には、昨年の秋口に巨大なスズメバチの巣が発見されました。桐生市役所から委託された業者により駆除され、幸いけが人が出た話は聞いていません。

そこで今年には有志がネット情報と自然の家職員さん情報をもとに、荒神山周辺のスズメバチトラップによる駆除に挑戦しました。トラップは2リットルのペットボトルに誘引剤を入れて、上部に3~4ヶ所の穴をあけたものを、1.5メートル位の高さの枝に吊るすだけの簡単なものです。

スズメバチを誘い出すための誘引剤は、1本当たり焼酎300cc、酢100cc、砂糖100gをよく混ぜたものです。ブドウの皮を入れておくとさらに効果的とのことで

した。

5月中旬の早朝に荒神山周辺の5ヶ所に設置しました。日中に設置するのはスズメバチの活動が盛んなので避けるべしとのこと。

設置後トラップの様子を日々確認しましたが、1週間は小さなハエ、アリ等が入っただけで、肝心のスズメバチは入りません。ところが、8日目に1ヶ所のトラップで2匹のスズメバチが捕獲されました。近所の養蜂家の方によると設置後1週間の間に誘引剤の発酵が進んだことで、誘引効果が出たとのこと。また、トラップに捕捉されたハチは危険察知フェロモンを出し、仲間知らせるため、ぞくぞくと捕捉できるとのこと。確かに以降数日の間に多くのスズメバチが5ヶ所のトラップに入り駆除することができました。今年の駆除成果は、女王蜂11匹、働きバチ30匹位でした。なお女王蜂1匹で働きバチ200匹に相当するようです。来年は4月早々に設置して女王蜂の駆除数をさらに増やそうと思ひます。

このような小さなことの積み重ねで少しずつでも安全安心な荒神山になればいいと思ひます。



## 高齢者接種50%越え、みどり市

みどり市は、7月3日(土)に新型コロナウイルス感染症ワクチンの接種率を発表しました。

接種率については、国が整備したワクチン接種記録システム(VRS)へ登録した件数により算出されたものを公表しています。



これによると、7月2日(金)時点の摂取率は、65歳以上で1回目の接種をした

のは57.01%、2回目の接種が完了したのは22.24%となり、高齢者の摂取率は50%を超えました。

これを受けて、新たに60歳から64歳の接種予約の受付開始が7月5日(月)午前9時から行なわれています。予約方法は電話及びLINEで、接種開始は8月中旬以降の予定です。写真は笠懸公民館の接種会場。

## 田植えのあとは「まんが洗い」

阿左美沼の南から笠懸東小学校にかけて、三区にも水田地帯が広がっています。この地域の水田は5月から6月に田植えが行われています。

田植えが終了すると、これまでの作業で使ってきた馬鍬(まぐわ・まんが)などの道具が不要になるので、これを洗い清める行事が「まんが洗い」です。今では、トラクターが使われるため「まんが洗い」の際には田植え機などの機械を掃除します。



馬鍬は、馬にひかせて田んぼを耕す道具で、かつては各家で馬や牛を飼い、馬鍬・牛鍬などで耕すことが多く行われていました。家によっては洗い清めた道具に神酒や供え物をあげることもあり、「まんが洗い」には田植えが無事終了したことを感謝する意味もあると考えられます。

「まんが洗い」の日は農作業を休む「農休」であり、田植えの重労働を終えた身体を休める日でもありました。かつては稲の裏作として麦を栽培していた農家も多く、麦の収穫後にあたるため、小麦饅頭などを作ってご馳走を楽しむこともありました。

機械化が進んだ現代では、農作業は昔とは比べ物にならないほど効率化され、現在では馬も馬鍬も見られなくなり、「農休」の風習も行われなくなりました。それでも、田植えを重要な農作業と考え、田植えの終了をもって農作業に一区切りをつける考え方は今も引き継がれています。

## 写真で見る三区の祭り

新型コロナウイルス感染症の影響で、2年連続で中止となった地区納涼祭ですが、古い写真で昔の様子を振り返ってみましょう。

この写真は、現在の森田石油の場所で1968年8月25日(昭和43年)に開催されていた笠懸村三区八木節大会の様子です。

この頃の八木節櫓(やぐら)は3段の櫓で建てられており、一番下が



踊りの舞台・上の2段目、3段目で音頭とお囃子を行っていました。今では考えられない高さの櫓で八木節大会を行っていました。また、櫓の下では大勢の人が音頭に合わせ輪になって踊り、盆まつりを盛り上げて楽しんでいました。写真をよく見ると三区で今も活躍している人の顔が見られます。



## 子ども育成会の活動について

日頃より、育成会活動にご理解ご協力をいただきまして誠にありがとうございます。

今年度も区民の皆さまに育成会協力金のご協力をいただき育成会の活動準備を進めていましたが、新型コロナウイルスの感染防止のため、ドッジボールの練習と夏季大会および八木節教室は、活動を自粛および中止となっています。

そのため、今後の活動再開については新型コロナウイルス感染防止を最優先に検討していきますので、何卒ご理解いただきますようお願い申し上げます。今後の主な活動予定については次のとおりです。

敬老祝賀会(八木節披露)⇒中止、ドッジボール秋季大会⇒中止、日帰りバス行事⇒中止、資源ごみ回収⇒状況を見て検討。各種行事についての案内は別途回覧板で案内させていただきます。三区子ども育成会会長 小久保 美代

さんくすがインターネットでも見られます

<https://sannkusu-kasakake.com>

右のQRコードリーダーを読み込んでください



## 笠懸東小、5年生が田植え体験授業



6月10日(木)午後2時より、笠懸東小学校5年生85名による田植え体験授業が実施されました。

当日は気温31度(桐生観測所)と7月下旬並みの真夏日でしたが、児童達はマスクを着用し、蜜を避けるため3組に分かれての作業となりました。

支援者による注意事項や作業説明の後、一列に並んで田植えとなりました。最初は慣れない田圃のぬかるみや苗の植え方に戸惑っていましたが、あっという間に慣れて上手に植付け出来るようになっていました。

組ごとに約35分程度の作業でしたが、貴重な体験学習になったと思います。

この田植え前の作業として、籾種まき、田起し、肥料撒き、代掻きなど支援者による事前の準備があって田植えとなることも学んでほしいものです。

秋には新型コロナウイルス感染症も収束し、稲刈りの収穫体験ができることを願います。

## 事業所紹介(3) はしづめ歯科医院

当院では、痛いところや悪いところだけを治療するのではなく、いつまでも美味しく食べることができ、素敵な笑顔で健康的な生活を送れることが大切と考え、それらの一助となるような歯科医療を提供しています。

また、矯正治療、インプラント治療については、それぞれ専門医を招聘して質の高い診療を行っています。

さらには対応が困難な様々な症例についても、近隣の医療機関や総合病院、大学病院と連携し対応していますので、お困りのことやご心配なことがあればいつでもお気軽にご相談ください。

<特別区費のご協力を戴いている事業所を紹介しています>



## 小沼西道路沿いにベゴニア植栽

6月19日(土)、農地・水 阿左美地域環境保全協議会(武井章会長)主催による景観形成事業として阿左美沼の小沼西側道路沿いにベゴニア370株を植栽しました。

当日は朝から本降りの雨でしたが、協議会役員や地元住民団体の代表者21名が参加しました。この事業は国、県、市からの支援を受け農業者や個人だけではなく地域住民が協力して景観の維持に努めようとする事業です。年間を通してこの道路沿いを管理する事で、景観向上に貢献できると期待しています。



## ちょっとピンぼけ

稲作は日本の原風景と言われています。田圃が醸し出す風景が爽やかな風となって、目にも肌にも涼しく、清涼感を与えてくれています。今年も豊作を願う一方で消費者のコメ離れには歯止めが掛からず空前のコメ余りが起きています。

主な原因として人口減少による需要減、コロナ禍で外食産業の消費減、食生活の多様化により相対的にコメの割合が減少、また、近年では「炭水化物は取らない」など糖質オフダイエットブームも起きています。

農水省が、各産地に主食米以外の大豆や加工用米、飼料用米などへの切替を促していますが、需要減に応じた50万トン相当の減産には、東京ドーム

約21,000個分の作付面積削減が必要になります。しかし、人類の歴史は飢餓との戦いの歴史でもあると言われてしています。近年の飽食の時代は僅か50年余りに過ぎません。

お米は長期保存が出来ます。-20度なら数百年もつと言われてしています。また、主食米以外にも加工品の原料として多様な食品に利用されています。

コメ余りは一時的な現象として捉えて欲しいものです。食味ランキングで最高ランクの[特A]米を人間より家畜が多く消費するような時代にならない事を願っています。